

2023 年度研究助成(2年助成) 研究実績報告書

代表研究者	大江 理英
研究テーマ	『生徒へのコール&プッシュ教育に至る「生命と心を〈守り・育て・つなげる〉養護教諭支援プログラム』の開発

I. 研究の背景と概要

学校は、子供たちが人格を形成する重要な場であり、子供の健康や安全の確保が最優先されなければならない。しかし、中学校では年間 25 万件以上の傷病が発生しており、小学校や高校などに比して最も高い発生率であるが、学校内で急変対応を担う養護教諭の急変対応の実際と的確な急変対応にむけたニーズは明らかになっていない。

本研究では全国の公立中学校に勤務する約 1,100 名の養護教諭を対象に中学校の養護教諭の急変対応の実際と的確な急変対応にむけたニーズに関する全国調査を実施した。

統いて、これまでの研究成果から養護教諭が誰でもできる胸骨圧迫+AED 蘇生法であるコール&プッシュを習得し生徒への教授と地域につなげる養護教諭支援プログラム(以下、支援プログラムとする)の開発と効果の検証を行った。養護教諭 13 名を研究対象とした支援プログラムは 3 時間 30 分(1 回)の集中プログラムで実施した。支援プログラムの内容は講義(心肺蘇生の理論・基礎知識)、実技トレーニング(Call & Push 講習を参考にした心肺蘇生講習)、VR 閲覧(学校内で円滑に模擬生徒に対して心肺蘇生を行う VR の閲覧)、演習(シミュレーターを用いた胸骨圧迫と AED の実技演習)とディスカッションであった。支援プログラムの効果は無記名自記式質問紙により本プログラム実施前後の養護教諭の心肺蘇生に関する知識・教育スキル、ならびに急変対応や心肺蘇生教育について変化したことをインテビューなどから調査した。

II. 研究の成果

全国調査の結果から、ほぼ半数の養護教諭が急変の対応を経験しており、一次救命処置の教育は約 9 割が受講していた。しかし、養護教諭が受講した急変対応に関する教育は講義が主体であることから、リアリティのある教育方法の開発が必要であることが分かった。また、急変した生徒への事後支援は約半数の養護教諭が行っているものの、周囲の生徒に対する事後支援は 2 割程度にとどまつたことから、多様な立場にある生徒への事後支援については今後の検討が必要である。また、学校内の救急体制について、学内において救急要請時に携帯電話が活用されることとは少なく、学校環境に即した学校内外における救急体制の構築として救急要請の伝達方法の検討や開発が必要である。

『生徒へのコール&プッシュ教育に至る「生命と心を〈守り・育て・つなげる〉養護教諭支援プログラム』の開発/実施と教育効果の検証(研究名:「中学校の養護教諭を対象とした心肺蘇生と生徒への心肺蘇生教育に関する支援プログラムの効果:非ランダム化介入パイロット研究」)の成果として、本プログラム実施前後の養護教諭の心肺蘇生に関する知識については若干の改善が見られた。インテビューによる事後評価では、「リアリティがあってわかりやすかった」「話し合えたことで生徒に教育してみたいと思った」「実際の急変時にトリアージができた」などの意見が得られた。しかし、継続的な心肺蘇生教育の必要性が課題とされたため、支援プログラムの一環で作成したVRを活用したオンデマンド教育の開発が期待される。